

《公開講演会記録》

知つていそつで知らない

ノーベル賞の話

元住友商事ストックホルム事務所長 北尾 利夫



本日は当会のような伝統ある団体にお招きいただき、光栄でございます。私は1986年〜91年までストックホルムにいました。事務所がノーベル賞の授賞式を行いますコンサートホールまで歩いて5分、毎日の通勤の車の中から、その立派なホールを見上げておりました。そんなことから、ノーベルやノーベル賞に関心を持つようになりまして、あれこれ勉強して25年になります。

ノーベルとダイナマイト

さつそくノーベルのプロフィールですが、ノーベルは1833年にストックホルムに生まれて、1896年に同地で亡くなりました。63年の生涯です。日本の年代に直しますと、明治維新を挟んで前後30年ずつくらいを生きた人です。

19世紀の最も重要な発明とされるダイナマイトを発明して、それを世界中に売り広め、その結果莫大な財をなしました。その大きな遺産のほとんどすべてを投じて、ノーベル賞という、それまでには例がなかったまったく新しいものをつくりました。ノーベル賞は1901年に始まり、昨年で111年、第1次世界大戦、第2次世界大戦の困難な時期も乗り越えて、世界最高の栄誉として今日も輝いています。

ノーベル賞のすごいところは2つです。まず世界最初の国際賞ということ。国籍に関わらず、ある分野で世界で一番大きな功績を上げた人に賞を与える。今日国際賞というのは、何ら驚くものでもありませんが、当時としては破格の斬新なアイデアでした。何しろ19世紀といえますと、ヨーロッパ諸国も国家主義の高まりとか、植民地主義のぶつかり合いとかで、しょっちゅう戦争をしていた時代です。しかし、ノーベルは遺言で賞を与えるにあたっては、候補者の国籍は一切考慮してはならない、と言っています。何という先見性、博愛主義というか、理想主義は、驚くべきことだと思います。

二番目の大きな特色は、賞金が飛びぬけて大きいということです。1901年、第1回のノーベル賞の賞金は、約15万クローネ。当時のヨーロッパの大学教授の年収の20年分に相当するといわれました。

今日、国際賞はたくさんありますが、ノーベル賞の賞金は、ずっと抜けて大きい。賞金は基金の毎年の運用成績によって変わる仕組みですが、たまたま2001年から2011年までは、1千万クローネという最高の額を維持しています。1千万クローネは、為替レート次第で変わりますが、クローネ高のときですと、1億1千万円、あるいは1億7、8千万円、私がスウェーデンにいたころの為替レートですと、2億1千万円、2億2千万円です。発足当初の実質価値をちゃんと維持しています。スタート当初の実質価値の1・3倍、1・4倍にあたります。

たくさんある世界賞の賞金額はほとんどが数万ドル、数百万円のレベルです。賞金の大きさが知られるのが、京セラの創業者の稲森さんが私財を投じて、3つの分野で賞を出す「京都賞」ですが、この賞金は5千万円です。

「日本国際賞」という、松下幸之助の遺産で始まったものも定額の5千万円です。ですからノーベル賞の1億何千万、

時には2億というのは、桁はずれに大きいものであることが分かります。

巨額の賞金を可能にしたのは、ノーベルのダイナマイトの発明です。

人類が火を手にしたのは40万年前だそうですが、それに比べると火薬の歴史はずっと新しく、黒色火薬といわれる、硝石、硫黄、木炭の粉を混ぜたものが14世紀にはあったことが確認されています。これはダイナマイト以降の、近代、現代の火薬に比べますと、はるかに爆発力の弱いものでしたが、人類の持つ唯一の火薬でした。1543年に種子島に鉄砲と共に伝来したのも黒色火薬です。

ようやく1847年に、イタリア人のアスカニオ・ソブレロがニトログリセリンを発明します。これはごく少量でも時にもすごい爆発を起こす。しかし意図的に爆発させようと思っても、うんともすんともいわない。非常に条件が難しい、制御不能な物騒きわまりない物質で、むしろ放置された状態でした。

この強烈な爆発力に注目したのがノーベルでした。まずニトログリセリンを大量かつ安全につくる方法を確認して、第1号の特許を取りました。次にそれをいかに確実に安全に爆発させるか、それには「起爆原理」が必要だったのですが、

この起爆原理の発明のほうが、ダイナマイトの発明より、火薬史上ではより重要な業績だということになっています。

ニトログリセリンは、液状、油状で、爆薬として急速に広まるのですが、取り扱いが非常に難しく、世界中のあちこちで大爆発事故が頻発します。それを安全なものにと苦心の末、できあがったのが固形の、珪藻土に吸着させるということです。安全で確実に強烈な爆発力を持った物としての「ダイナマイト」の発明です。

このダイナマイトが急速に世界中に普及します。その背景ですが、1765年にワットが蒸気機関を発明し、産業革命が始まります。石炭が大量に求められます。そこで炭鉱の開発にダイナマイトが活躍しました。19世紀は製鉄業が発達し、そこで鉄鉱石、製鉄にも石炭がいりますから、この分野でもダイナマイトはなくてはならない物になりました。

最初のころは技術的に難点もあり、輸送とか保管には危険を伴いますから、そのためには使用現場のなるべく近いところに工場を造る必要があったため、ヨーロッパ中、あるいはアメリカに急速に会社を設立し、ノーベルは大企業家にのし上がります。一連の発明をしたのは30歳

のときですが、40歳のときには、大発明家、大企業家、多国籍企業家、それから大富豪としての名前を確立しました。

ノーベルは1896年に脳溢血で倒れます。後に残されたのが、世界20カ国に96のダイナマイト製造会社と、355件の特許を含む3300万クローネの大きな遺産でした。3300万クローネを今の価値に計算すると、250億円（350億円くらい）。そんなものかと思われるかもしれませんが、何しろ150年も前に活躍した人の話です。世界の経済規模が今とは大いに違います。

遺言とノーベル賞

ストックホルムで国王級という盛大な葬儀が行われ、ヨーロッパ最大級の遺産に注目が集まる中で、遺言書が開封されました。そこには誰もが想像しなかった衝撃的な内容が書かれていました。それがノーベル賞の構想です。

まず親族に対する遺贈ですが、ノーベルは生涯結婚しませんでしたので妻子はなし。両親も兄弟もすでに亡くなっていましたので、結局、6人の甥と姪が相続人となりました。この6人の誰にいくらと書いてあるその合計は遺産総額の3%



コンサートホールでの授賞式

「Copyright (c) The Nobel Foundation 2006, photo:Hans Mehlin」

にも満たないものでした。そのほか友人、知人、身の回りの世話をしてくれた人にもいたるまで、全部で19人に対する遺贈が記されていましたが、全部合わせても総額の5%に達しませんでした。

そして遺言は、「残りの換金可能な私のすべての財産は、私の遺言執行人によって、安全な有価証券に転換し、それを基金とし、そこから生ずる金利収入を毎年、その前年に5つの分野で人類に最も大きな功績を残した人に賞のかたちで与える」

とありました。そこに掲げられたのは、物理学、化学、生理学・医学、文学、平和の5つでした。

その次に、その選考機関が記してありました。物理学、化学が、王立スウェーデン科学アカデミー、生理学・医学はカロリンスカ研究所。研究所と書いても実態は医科大学で、世界最高レベルの研究機関です。それから文学賞がスウェーデンアカデミー、平和賞はノルウェー国会が指名する5人の委員会、となっていました。

平和賞だけ、なぜノルウェーかということですが、ノーベルは何も書き残していませんし、誰にも話していませんので、本当は分かりません。ただ、当時ノルウェーはスウェーデンの属国でした。1815年にデンマークからスウェーデンに割譲されて、かなり広範囲な自治は認められていたのですが、スウェーデンの国王を共通の王として戴く、いわゆる同君連合を形成していたことが一つの背景にありました。

遺言の内容が世間の知るところとなり、最初はその高邁な思想が称賛されたのですが、少しそれが落ちていくと、今度はいろいろな方面から批判、反対が起ってききました。一番激しかったのが、

遺族の猛反対です。いくら何でも取り分が少な過ぎるというのです。

それから、「ノーベル賞は非愛国的である」という非難もありました。外国人に賞を与えるなんてとんでもない、と。ヨーロッパ中が戦争をしている時代ですから、外国人に賞を与えるというのは、当時としては破天荒な考えであったわけです。また当時のスウェーデンは北欧の貧しい小国でしたから、巨額な賞金が毎年、国外に出ていくのは国の利益に反するというわけです。

それから生前、何の打ち合わせもなしに、いきなり選考の大役を押しつけられた各団体の拒否反応もありました。世界中から最も功績のあった人に賞を出すという、そんな難しい仕事は引き受けられないとか、あるいは世界の学界の平和を乱すとか、費用的にもマンパワー的にも耐えられないとか、です。

ノルウェーに平和賞を委ねたことも非難されました。同君連合を組んではいしましたが、ノーベルが亡くなったころは、スウェーデンからの独立の気運が出ていまして、非常にスウェーデンとノルウェーの間は外交的に難しい時代だったのです。ということで、ノルウェーに選考を委ねたことに對する強い反対論がありました。

ですから、ノーベル賞はすんなりスタートしたわけではないのです。これらの難関をどう克服していったか。ここで大活躍をしたのが、ラグナール・ソールマンという遺言執行人です。当時弱冠26歳でしたが、ノーベルの最晩年の3年間、研究助手あるいは相談相手として、信頼の厚かった人です。この人が遺言書で遺言執行人に指名され、ノーベルの意を体して、たいへんな活躍をします。

ソールマンはすべての反対論を説き伏せて、ノーベルが亡くなってから3年半後、1900年6月に関係者全てが承諾して、ここで初めてノーベル賞を運営するための組織として、遺言にはなかった「ノーベル財団」の設立が、国王の認可を受けます。

ノーベル財団と各選考機関の中に選考のための組織、「ノーベル委員会」が設けられ、5回目のノーベルの命日、1901年の12月10日に第1回のノーベル賞の授賞式が行われました。

ノーベル賞には5つの分野があります。ノーベルは爆発とか火薬の専門家ですから、物理学や化学賞は分かりますが、どうして、生理・医学賞、文学賞、平和賞、こういうものを設けたかという点、これも本当のところは分からないのですが、

すべてノーベルの強い関心ある分野だったことは確かです。

そもそもノーベルはレオナルド・ダヴィンチのようなたいへんなマルチ人間でした。たくさんの発明をした中でも、たとえば人造皮革、合成ゴムとか、人造絹糸、ギア付きの自転車とか、パイプラインとか、19世紀の人がこういうことをやっていました。気球にカメラをぶら下げて航空写真を撮ったり、ロケットを開発したりなど、それぞれがプロのレベルでした。

中でもロケットに関する技術は、ドイツの世界的な鉄鋼メーカー、クルップが買い取ったほどですから、レベルがいかに高かったかということがお分かりになると思います。

生理学・医学分野でも、いろいろな実験をしたり、構想がメモされていたり、カロリンスカ研究所の中堅の生理学者を招聘して、研究室を与えて、その人に自分が持っていたアイデアを研究してもらったりもしていました。たとえばニトログリセリンの血管拡張の効果を試す動物実験をしたり、また病氣治療のために血液を入れ替えたかどうか、今の輸血につながる構想の実験を手掛けています。

ただノーベルの関心の方向は、人体の部分とか、機能などを研究する生理学です。病気の診断とか治療などの狭義の医学ではありません。ですから「ノーベル生理学・医学賞」が正しいのです。日本のマスコミは正しいぶん無頓着でして、新聞には「医学・生理学賞」と書いてあったり、ひどいのは「医学賞」と書いてあったりします。どちらでもいいような話ですが、どうせなら、正しく書いたほうがいいと思います。

さて、なぜ文学賞があるのか？これもノーベルの深い関心のあった領域で、彼はスウェーデン語のほかに、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、5カ国語を母国語と同じように流暢に操ったようです。当時の流行作家、バイロンとかシェリーとか、スタンダー、ユゴー、トルストイ、その時代の有名、流行作家の作品に原語で耽溺したということです。自分自身でも青年期や最晩年には詩や戯曲、小説を書いていきます。

平和賞の理由ですが、これについてはダイナマイトという人を殺傷するものを発明した罪滅ぼしのために平和賞をつくったのだ、というもっともらしい理由がよく書いてあります。しかしこれは俗説です。



ストックホルム市庁舎

「Andreas Trepte, <http://www.photo-natur.de/>」

ベルタ・フォン・ズットナーという女性がいきました。彼女は、ノーベルが40歳過ぎの時、秘書に応募して来たオーストリア人で、非常に教養のある、ノーベル好みの人だったようですが、事情があって短期間でノーベルの元を去りました。しかし、その後もノーベルが亡くなるまで文通を続け、二度ほど会ったりもしています。このズットナーは、後に19世紀の『アンクル・トムの小屋』を書いたストウ夫人に並ぶ女流作家だった人です。

そのズットナー女史が1890年代に、世界平和に関心を持ち、ヨーロッパで世界会議を組織するために奔走しました。ノーベルもそれに共鳴して、国際会議を開いたりする費用のために寄付をするなど支援していました。

ノーベルとズットナーは、戦争はよくないという点では共通していましたが、アプローチが全く違いました。ノーベルは非常に現実的な考えの人で、ダイナマイトという強烈な爆発物が発明された以上は、それが戦争に使われるのは誰も止めることができない、それよりむしろ武器の開発は行きつくところまでいって、一発で世界が破滅するような物に到達したら、もうどの国も戦争に使わないだろう、と考えました。現在の「核の抑止力」と同じ考え方です。

ノーベルは最晩年には大砲の開発に血道を上げます。スウェーデン陸軍に採用されるほどの250ミリ砲を開発しています。そのころにノーベルがズットナーにあてた手紙の中で、「あなたの平和会議より、私の兵器工場のほうが早く平和に役に立つでしょう」と書いています。これは遺書を書くちょっと前です。そういう人が慙愧の念にたえかねて罪滅ぼしのために平和賞をつくったというのは、

ちよつとつじつまが合わないと思います。
以上がノーベルが5つの賞をつくった背景です。

「経済学賞」はノーベル賞ではない

それでは「経済学賞」はどうなんだ？
と思われるかもしれませんが、「経済学賞」というのはノーベル賞ではありません。
「ノーベル経済学賞」というのはないので

どうして紛らわしいものが存在するの
かといいますと、1968年に国立スウェー
デン銀行が創立300周年を迎えました。
これは世界で現存する最古の銀行です。
その記念行事として特別基金が設けられ、
そこから賞金を出すので、経済学賞を設
けてほしいという申し入れが、国立スウェー
デン銀行からノーベル財団に対してなさ
れました。

当然ノーベル財団は断り、選考機関も
反対しました。しかし、科学アカデミー
だけが支持しました。科学アカデミーの
中にいろいろな学問分野があるので、
経済学も一分野ですから、科学アカデミー
はスウェーデン銀行の要請を支持しまし
た。そして経済学賞が生まれました。私
の推測ですが、ノーベル財団としては、

科学アカデミーには物理学賞、化学賞の
選考という大仕事を担ってもらって、恩
義があります。そんな関係で妥協が行わ
れたのではないのでしょうか

経済学賞は毎年、ほかの賞の賞金の額
の1・65倍の金額がスウェーデン銀行か
らノーベル財団に寄付されます。その0・
65の部分は、選考のための費用とか、記
念式典の費用などの相当分ということだ
す。そして科学アカデミーの中に他の賞
と同じような選考機構、同じようなルー
ルをつくり、毎年12月10日のコンサート
ホールでの記念式典の同じ壇上で、国王か
らディプロマ（賞状）と賞金とメダルが
授与されます。しかし、筋だけは通して
あって、与えられる賞の名前は「アルフ
レッド・ノーベル記念スウェーデン銀行
経済学賞」という名前で、「ノーベル経
済学賞」とは言いません。

その後も「経済学賞を設けたのは適当
でない」という議論は、スウェーデンで
も続いています。たとえば、ノーベルの
遺言にあるのは「人類に最も重要な貢献
をした人」ですが、経済学にはこの言葉
は似合わないように思います。

私が昨年の秋に出した『知っていいそ
うで知らないノーベル賞の話』について、
いろいろな方から感想をいただいた中で

一番多かったのは、「経済学賞はノーベ
ル賞でないというのを初めて知った」と
いうものでした。

難しい受賞者選考

賞の選考は、世界中から推薦されてき
た人を対象に行われるのですが、人の業
績を他人が比較し、評価するわけです
から、難しい作業であることは間違いが
ないのです。しかし、これも賞によって状
況がいろいろ違います。

自然科学3賞の場合は、客観性とか、
透明性、情報公開の度合いが高い。世界
中の学者の業績は学会で発表され、学会
誌に載り、議論が行われ、さらに「ネイ
チャー」とか「サイエンス」とか権威の
ある論文誌に載ります。ですから、どこ
の誰がどういう研究をして、今どのくら
いまでいつているとか、あるいは過去に
なされた発明、発見が現在世界でどうい
う評価を受けているか、といったことは
研究者の間では共通の認識があります。
そういう中で候補者が推薦され、選考さ
れますから、かなり煮詰まった段階から、
ノーベル賞の選考はスタートするといえ
ます。

それに対し文学賞となりますと、国と

民族が違えば、文化、伝統、宗教、地方性が全部違う。そのようなものがいろいろ絡まって文学が生まれるわけですから、これとこれのどちらが優れているかという比較は非常に難しい話です。

言葉の問題もあります。文学賞の場合は、スウェーデンの人を除いて、英訳で審査をするのですが、非英語国の人はいくら優秀な作品を出している文学者でも優秀な翻訳者に恵まれなければ土俵にも載りません。たとえば川端康成の受賞でも、サイデンステッカーという優れた翻訳者で、かつ優れた日本文学の理解者があったからこそとも言えるでしょう。川端康成の前にアジアで初めて文学賞を受けたのは、1913年のインドのタゴールですが、これは旧宗主国の英語でほとんどの作品が書かれていますから、川端康成がアジア固有の言語の作品群で受賞した初めての例です。最近ではだいぶ受賞国が多様化してきましたが。

平和賞も難しいです。平和受賞者をカテゴリーに分けてみますと、国際平和の推進、国家間・民族・宗教間対立の解決努力・調停、人種問題、民族独立運動、人権問題、軍縮問題、民主化運動、武器の削減・廃絶、人道支援、難民救済、貧困や飢餓への取り組み、環境問題という

ように非常に分野が多岐にわたっています。これだけ広い分野で大きな働きをした人の業績をどうやって比較するか、不可能に近いことです。また平和賞の場合は、国際政治、国内政治の問題が絡みますから、誰がもらってもどこからか文句は出ることが多い。たとえば、ダライ・ラマ14世が受賞したら中国が文句をいうとか、アウン・サン・スー・チーさんが受賞したときは、ミャンマー政府が授賞式に出るのを妨害するとか、誰がもらってもどこからか文句が出ます。

平和賞は通常、過去の業績に対して出されるのですが、みなさんご記憶のゴア元米副大統領の地球温暖化に関する政府間パネルとか、オバマ大統領の核兵器の廃絶のプラハ演説とか、こういうのはそれまでに実績というより、その上に立って、さらに努力してほしいという、期待による授賞ということになります。

どこからも反発がないのは、その人の長年の信念に基づいて、ずっと人道的な努力をしてきたという功績、たとえば、シュバイツァー、マザー・テレサ、ツツ大主教などの場合です。どこからも異論は出ません。それから国連の平和維持軍とか、国境なき医師団のように、団体、組織が受賞する場合があります、こういう

のは反対が出ません。

自然科学3賞の場合は、たまたま1901年という、20世紀の1年目からスタートしましたから、受賞の結果を振り返ると、見事に20世紀の科学の進歩を示しています。それがきちんと顕彰され、科学者に対する大きなインセンティブとなっています。文学賞と平和賞は、それぞれ固有の難しい問題を孕みながらの受賞ですが、ノーベルの遺言を時世に合わせながら、これからも延々と続いていくであろうと思います。

(1月27日・講演会)

講師略歴(きたお としお)

1935年 京都市生まれ

1958年 大阪外国語大学ドイツ語

科卒

住友商事入社

ロンドン事務所長代理

ストックホルム事務所長

著書『知っていいそうで知らないノーベル賞の話』(平凡社新書)